完璧とは、何なのだろうか

緋村fu

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

白恋中学校にて完璧を目指す少年を支える　ＭＦ白鷺銀。

完璧にとらわれ、過去の出来事から抜け出せない吹雪士郎・・・

この二人のサッカーの行く末は・・・

目　次

エイリア学園編

1話：完璧に囚われた少年と完成された少年 ―― 1
2話：困惑広がる ―― 5
3話：VS雷門…そして… ―― 10
4話：特訓開始！ ―― 16
5話：試合開始！ ―― 23
6話：後半開始！決着！ ―― 31

エイリア学園編
1話：完璧に囚われた少年と完成された少年

「兄ちゃん、今日も俺たちが勝ったな！」
「うん。次もがんばろう」
「兄ちゃんが守って、俺が点を取る！そして銀が俺たちを導く！」
「はは、３人がいれば完璧だな」
「「完璧？」」
「「３人がいれば負けないってことだよ。」
「完璧・・・完璧か・・　そうだな！兄ちゃん！銀と一緒に完璧になろう！」
　「うん！やろう！」
「次も頑張るんだよ」

ゴゴゴゴ・・・・

「・・い、おい、おい！士郎！」
「っ、、なに、、？」
「話聞いてたか？今日、雷門中がここにくるらしい」
「雷門が？」
「やっぱ聞いてねーじゃねーか・・打倒エイリア学園目指して、今新しいストライカーを探してるんだとよ・・」
「へぇ、そうなんだね」
「それをおれ達が案内することになった。だから、外ぶらついて迷

うんじゃねーぞ。おまえはすぐ出歩いて迷子になるからな」
「はいはい、わかったよ

銀」

ＳＩＤＥ雷門
雷門中サッカー部は地上最強イレブンを目指し北海道に来ていた。
その道中にて、
「監督！北海道に来たのは何でですか？」
オレンジバンダナをつけた雷門中キャプテン円堂守が監督である、吉良瞳子に尋ねた。
「北海道にきたのは、新たなストライカーを仲間にするためよ。」
「新たなストライカー？」
「ええ、豪炎寺に変わるストライカー、熊殺しの異名をもつ吹雪士郎という子よ。それに。白恋には完成された天才ＭＦと呼ばれた白鷺銀という子がいてその子も見に来たのよ。」
「熊殺し・・・？」
「けっ、豪炎寺の代わりはいねぇ・・・」
「天才ＭＦ・・・白鷺銀か・・・」
円堂は異名を不思議がり、染岡は気に入らなそうにし
現在雷門中ＭＦを務める鬼道有人は白鷺銀に興味を惹かれたようだ

すると・・
キキーッッッ
「「「うわっっっ!!??!!!!」」」
「っ・・・どうしました？」
「人だ・・・」
運転手の古株が指すところには、確かに人がいた。
めっちゃ凍えていたが・・

それを見たキャプテンの円堂が
「どうしたんだ?こんなところで・・・乗れよ!」
と声をかけた。
すると少年は
「あ、あ、ありが、ありがととと」
と凍えながらいった。
「あんなところで何してたんだ?」
「ははっ、ちょっと迷っちゃって。」

そんなたわいのない話や、その道中熊にあい、その少年が倒すといったことがあった。
そして、そして白恋中学校に着く前の雪が積もっているだけの道で
「ここで大丈夫だよ。乗せてくれてありがとう」
「えっ、ここでいいのか?」
「うん、ほんとにありがとう。気をつけてね」
雷門はその少年を下ろしていった。
少年はおもむろにボールをなげ、
「さてと・・おっらぁぁ!!」
積み重なっていた雪を吹き飛ばした。
「はやくもどらなきゃ、また銀に怒られちゃうよ。」

ＳＩＤＥ現在
「おい!!吹雪!俺、客が来るからぶらついて迷うんじゃないっていったよな!?」
「ごめんごめん」
「反省しろよ・・ったく。おれが案内するはめになったじゃねーか。」
銀は忠告したにも関わらず、迷子になった吹雪に怒っていた。
「ったく。まぁいい。おそらく試合をやるだろう。いつも通り点を取って守れ。」

銀は一見おかしなこと言っているように聞こえる。だが士郎は・・・
「うん、それは安心して。完璧になるためにしっかりやるさ。」
「・・・そんじゃ、雷門中と顔合わせにいくか」

（極地に至る・・・そのために必要なものは・・なんなんだ？）
そんなことを銀は思いながら歩き出す

ここから完璧を目指す少年吹雪士郎とそれを支える白銀銀の話が始まる。

2話・困惑広がる

銀と士郎は雷門を案内した場所まで移動した。
そこではすでに荒谷紺子と雷門が会話をしていたが廊下を歩く銀と士郎を見つけ部屋へ入れた。
「あっ!!吹雪君!・白鷺君!」
雷門はどんなやつが来るのか身構えた
しかし入ってきたのは大男ではなくただの少年だった
すると・・・
「あれ?さっきの人たちだ」
「ん?お前、雷門とあったのか?」
「うん。迷子になった僕を途中までバスで連れてきてくれたんだ。」
「なるほどな」
2人は会話をしていたが、雷門は驚愕していた。
「吹雪士郎って、お前だったのか!」
「お前が熊殺しだってのか!」
「あぁ・・実物を見てがっかりさせちゃったかな?・噂のことを聞いた人はみんな大男だと思っちゃうみたいで。これが本当の吹雪士郎さ」

「よろしく」
吹雪は染岡に手を差し出した。
しかし、染岡は・・・
「ふん・・」といい、握手には応じず、立ち去ってしまった。
「染岡!」
「私に任せて!」
去った染岡を気にかけ、なんかしてしまったのか気にする吹雪にたいし
「ごめん。染岡は本当はいいやつなんだ。」といったが吹雪は気にしないでと笑った。

そして銀が、

「さて、話は終わったか？ここに来た目的を話してもらおうか」
威圧しながら言ってきた。
それを見かねて士郎が
「銀」と注意するが銀は聞かずに監督である瞳子をにらんでいた
すると瞳子は言った。
「あなたたちを地球最強イレブンに引き入れたいの」
それを聞いた銀は
「俺たち？吹雪だけじゃなく俺もか？悪いがおたくのチームには天才ＭＦ鬼道有人君がいるじゃないか。俺が入る理由がないな。」
と眉をひそめながら聞いた。
瞳子はそんな銀に対しこういった。
「もちろん、はじめは吹雪君だけだったわ。しかし同時にこんな噂を聞いたのよ。北海道には完成された天才ＭＦがいると。それはあなたでしょう」
それを聞いて、しばし考える素振りをみせ、銀が言った。
「俺と士郎がチームに加わるかどうかはお前達の実力を見てからにする。まぁ、なぜかは知らんが士郎を目の敵にし握手に応じないＦＷがいるチームなどたかがしれてるけどな。」
そう言い切り、雷門のヘイト集める彼に対して瞳子は
「わかりました。あなたの提案を受けましょう。ただし試合はとらせてもらうわ」
と答えた。
それを聞いた銀は内心こう思っていた。
（いつも通りやれば余裕だな。）

フィールドに向かう、その道中
「きゃっ!!」

音無は足を滑らしたが、銀が後ろから支えることでけがを防いだ。そして忠告する。
「何やってんだ。雪の多いところに来ることが少なくて、注意が向かないかもしれないが、雪がある道は足下に特に気をつけな」
「あ、ありがとうございます・・」
あんなにヘイトを集めていたが、実は気が利く人物であるとわかった音無は照れながらお礼を言った。
その時・・・・
ゴゴゴゴ・・・・
「「なっ！何だ!?」」
雪が屋根から落ちた音が響いた・
雷門はほっとしていたが、銀が何やら吹雪に叫んでいた。
膝を抱えながら、座り込んだ吹雪に対して・・
「おい！落ち着け！士郎！雪が屋根から落ちただけだ！俺はどこにも行かない！」
「えっ・・そうだったんだ。よかった」
それを見た夏美は吹雪に対して大げさな、と言った。
それに対して銀が睨んでいるのに気づかなかった。
「はは・・ごめんね。少しびっくりしちゃって・・」
といって吹雪は笑った。
先ほどの銀と吹雪の会話について思うところのあった瞳子は吹雪と銀を見ていた。

フィールドに出て、両チーム、アップが終わり、白恋中は円陣を組んだ。
そして、静かに銀が言う。
「いいか。今日も今までと変わらない。何千何万と繰り返す試合の一つだ。最初は指示は出さない。各々考えた最善のプレーをしろ。無理だったら俺か士郎に渡せ。安心して挑戦しろ。

「さぁ今日も信じてるぜ。お前達・・今日も勝つぞ。」
銀の言葉は、力強いものじゃない。
しかし、いつも勝利へ導いたのだ。
そして・・・
白恋の志気は、高まったようだ。
「「「「おう!!（はい!!）」」」」
それの反対サイドの円堂と鬼道は
「あいつら、すごい気迫だ・・」
「しかし、吹雪と白鷺の力を完全に見るためには勝つしかない」
「あぁ!!さぁ!みんな!やろうぜ!」

そして両チームは、ばらけるが、白恋をみて雷門は困惑していた。

喜多見　氷上
空野　雪野　居屋　荒谷
白鷺
目深　吹雪　押矢
函田

というフォーメーションで挑んできたからである。
「何!?あの野郎!ＤＦにいる!」
「吹雪はＦＷじゃなかったのか?」
そう怒鳴る染岡と不思議がる鬼道に対して、銀は言った。
「ＦＷさ」
「じゃあ、なんでＤＦにいる!」
「お前に答える必要はない。しかしさっきから聞いていれば、士郎、士郎と・・・白恋をなめているのか・・・」
銀はそう言い切った。
それに対して染岡は完全に切れた。

「さぁーて・・・・」
そうつぶやいた銀は目をつぶった
（僕は負けを知らない。これまでもこれからも・・僕に負けはない。
なぜなら僕が絶対だ。そして、雷門を喰らってさらに僕は強くなる。）
そう心中でいった銀が目をひらいた
その開いた銀の目は黒から赤になっていた・・・

3話：VS雷門…そして…

試合がはじまった。
雷門中から、キックオフし、ボールを受け取った、染岡が1人走ってくる。
「おらぁ！どけ！」
「ひぃ、」
そんな染岡の気迫に負けた氷上と荒谷は、倒される。
「さっきは舐めたこと言ってたな！」
と、染岡は銀に迫るが、銀はそのまま染岡を素通りさせる。
「なっ!?なんだと!?」
「僕がお前を止める必要はない」
「舐めやがって！このまま決めてやる！」
染岡が、白恋中ゴールに迫る。
しかし…
「そういう乱暴なプレー。嫌いじゃないよ」
と、いう言葉とともに技を使う。
「アイスグランド!!」
その技によって染岡は凍り、ボールを奪われた。
その後吹雪は氷上にパスをするが風丸に取られる。
風丸が染岡にパスを出し、染岡にボールが渡り、シュートチャンスになる。
その時染岡の前に吹雪が立った。
染岡は吹雪めがけて
「くらえぇ！ドラゴン！クラッシュ!!」
しかし吹雪は動かない。
迫り来るドラゴンクラッシュを見て。
技も使わず簡単に止めてしまった…
「な、なに!?くそ、ボールをよこせ！オラァァ！」
すると吹雪はマフラーを触れながら呟く。

「出番だよ」
吹雪の周りに突風が発生し染岡が飛ばされる。
「へっ！この程度かよ！」
途端に吹雪は変わった。
「な、あいつ、雰囲気が、変わった。」
雷門はそれに戸惑っていた。
それに対して白恋は
「吹雪くん!!」と沸く。
「へっ、今日も俺についてきな！、勝たせてやるからよ!!」
と、猛然と吹雪は走り出す。
それに銀が並走する。
「士郎！」
「銀！今日も頼むぜ！」
「お前こそ。しっかり僕の指示に従えよ！」
２人は走る。
そのあまりの早さに雷門は誰もついていけない。
「は、はやい！」
「２人ともなんて速さだ！」
「銀！」
「アツヤ！」
「はっ、相変わらずのパスの旨さだ！」
「うるさい!!無駄口叩いてないで早く決めろ！」
「よっしゃ行くぜ!!!!!
吹き荒れろ!!
エターナルブリザァァード！」
超速でゴールへ近づくこのシュート。
円堂はこの技を選んだ。
「ゴッドハンド!!」
ドン!!

すごい音を立ててエターナルブリザードとゴッドハンドはぶつかり合う。
しかし
パキパキっ…バキン…
「なっ！」
「キャプテンのゴッドハンドがこんなにも簡単に…」

エターナルブリザードが神の手を粉砕し、ゴールを奪う！
その光景を見た吹雪は嗤う。
「この程度かよ！いいか、よく覚えとけ！
この吹雪士郎が白恋中エーススストライカーだ！」

円堂はそれを聞いて笑う。
「吹雪！お前のシュートすげぇよ！
なんとしても止めたくなった！」
「やれるもんならやってみな」
そう言い吹雪は自陣に戻る。

「まだ、手が痺れてる。一度は止めたと思ったのに…なんてパワーだ。」
自分の手を見ながら円堂は次のプレーに集中する。
「アツヤ。」
「銀。この試合全力で指揮しろ。」
「なんだと…？悪いがその価値は見いだせないな。悪いがこの試合も練習感覚だ。」
「それじゃダメだ。俺たちは完璧になるために、お前の力も必要だ。だから出せ。」
「……はぁ…仕方ないな…
出してやるからお前も全力だせよ。」
「へっ！あったり前だろうが」
「スーパーＤＦに、凄まじいまでのパワーを持つシュートを打つＦＷ。

これが吹雪士郎の実力か…　次は白鷲。先程吹雪に出したパスも正確だ。しかし、まだ、完成されたＭＦと呼ばれるにはまだまだな気もするが…」
鬼道は疑問視していたが。
センターサークルにボールをセットされ、自分も前を向いた瞬間…
とてつもない威圧感が彼ら雷門を襲った。

その威圧感の源の銀が告げる。
「君達に、僕の全力。絶対的勝者の力を見せよう。この試合、君達には点を取らせない。」
「なんて威圧。くっ…」

試合が再開される。
染岡が、今度はバックパスをし、鬼道にわたす。その鬼道に対し、銀が猛スピードで立ち塞がる。
「くっ…！（なんだこの違和感は）」
「悪いが、僕には未来が見える！ボールを渡してもらおう！」
そう言ってあっさりあの、鬼道有人からボールを奪った。
それに動揺した雷門はＤＦに回るが全てが後手。
簡単に銀の突破を許してしまう。
「アツヤが言うんだ。僕も本気を持ってお前らを潰そう！

吹き飛べ！ゴッド！ブラスター!!」
先ほどの吹雪と、同等、いや、それ以上のパワーを持ったシュートが円堂に向かう。
「うぉぉ！マジン・ザ・ハンド!!
ぐっ…どぉわぁ!!」
エイリア学園に破られてから、鍛錬を続けた円堂のマジン・ザ・ハンドを打ち破った。
「気にすることはない。これは元から決定事項だった。」と銀が告げ

る。

その銀と吹雪を見た、瞳子は微笑みながら、告げる。

「そこまで！試合終了よ！」

「なに!?くそ！このまま終われるかよ！」

瞳子の言葉を無視し、染岡は銀と共に歩いていた吹雪に向かって、ボールを蹴る。

咄嗟だった為ボールが、上がったが、

その落下地点に向かって両雄走る。

そして

「「おらぁぁぁ!!!!」」

激突。

勝者は吹雪。

敗者の染岡に侮蔑の視線を向け、そのまま叫ぶ。

「まだだ！まだやりたいねぇ!!」

しかし、銀が止める。

「よせ。本来この試合の目的は両方の力を見るものだった。その目的を果たした以上試合を続ける意味はない。」

「……わかったよ！」

「さて、これでお前達の実力はわかった。なぁ、士郎」

「うん、君達は強かった。」

そう銀と吹雪が決めて、雷門は呆けていたが、取り直した円堂が吹雪と銀に話しかける。

「お前達のシュート凄かったぜ！」

「君も凄かったよ！なにせ、僕たちのシュートに触れられたのは君だけだったから」

「あぁ、大抵のやつはシュートの威力に腰を抜かした雑魚だったからな。お前は凄いよ。」

そう話す円堂達の元に瞳子がくる。
「どうかしら、雷門中の実力は？」
それに対し銀が答える。
「この短い試合じゃ全てを把握することはできなかった。…だが、ただ強い力に巻かれるだけのチームじゃなかった。貴方の作ったチームは強かった。このチームに入れば俺はまだまだ成長できる。そう思いました。
なので、俺は入ると決めました。」
「僕は元から入るつもりだったよ」
と吹雪も答え、２人は雷門中加入が決まった。

（士郎が完璧に囚われている。それが克服できて、本当の意味で完璧になるには雷門が必要だ。俺では代わりにはならない。これからどうしていくか…問題点は俺も含め山積みだ…）
銀はただ、そう思っていた。

4話：特訓開始！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

吹雪と銀の雷門加入後。

「今日から白鷺くんと吹雪くんを入れて練習していくわ。試合形式で行うわ。」

「それでは始めるわ」

瞳子がボールを上になげ、それに鬼道と風丸がボールを取り合う。

「いいぞ！2人とも！食らいついていけ！」

「疾風ダッシュ!!」

風丸が鬼道を抜き去った。

その風丸を追って吹雪が取り返す。

「風になろうよ」

「凄い。あんなに風丸くんから簡単にボールを取るなんて…」

「やはり吹雪さんは強力なストライカーというだけじゃなくて、ディフェンダーとしても機能するんですね！」

音無たちはそう言う。

ボールを取られた風丸は取り返そうとする。

「スピードは、お前だけのものじゃない！」

「吹雪無理するな！」

「ボールを回せ！」

風丸のスライディングを吹雪はジャンプして避ける。

そして…

「いくよ…

よっしゃぁぁぁ!!!!　」

「ま、まただ！」

「たく、しょぼいなお前ら！ついてこれるやつらはいねーのか！」

「吹雪くんは攻撃に回るとまるでひとが変わったようになる。」

「確かにね…吹雪くんはとてもトリッキーなプレイヤーだわ…次のエイリア学園との試合はコントロールが難しそうね」

「アツヤ！無駄口を叩くな！よこせ！」
「チッ！ほらよ！」
吹雪は横を並走してきた銀に渡す。
「……（まだ……まだ…ここ!!）おらぁ！
しっかり決めろよ！」

「ちょっと待ったー！」
染岡が止める。
「え？」
「お前な！鬼道と一ノ瀬が回せって言ってただろ!?」
「だって僕はいつも銀としかプレーしてなかったし。」
「白恋じゃそうでもうちじゃ通用しねーんだよ！お前は雷門イレブンに入ったんだ！俺たちのやり方に合わせろ！」
「そんなこと急に言われても…そう言う汗臭いの疲れるなぁ…」
「誰が臭いって誰が！」
そう言い争う染岡と吹雪。
そこに銀が口を挟む。
「確かに君らに合わせるべきがチームの絆を高めるのはいいんだろう。しかし君たちは弱い。君たちにあわせても勝てない。僕らは本気で勝つためにこのプレーをしているんだよ。だから、君らが合わせるんだな」
「どんなにスピードがあろうが天才ＭＦだろうが自分勝手な奴とやれるか！
…無理なんだよ…こいつらに豪炎寺の代わりなんて！」
「それはどうかな…俺は吹雪たちに合わせるよ。」
「はぁ!?お前何言って！」
「俺にはこいつらのスピードと力がいるんだ。エイリア学園から、ボールを奪うには…
そうならなきゃ…また前の繰り返しだ…」
「なら、風になればいいんだよ、ね、銀」

「そうだな。」
円堂達は士郎達が何を行っているかは、理解できていなかった。
「ついてきて」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
白恋中の裏側へと連中は、歩く。
すると裏側はゲレンデになっていた。
そこに士郎と銀がボードをつけてくる。
「銀は相変わらずメットをつけないんだね」
「俺には必要ない。」
「はいはい。」
「士郎、先やれ」
「うん」
雷門は、２人を不思議そうに見ていた。
そして…
「みんな!よろしく!」
吹雪は白恋中のメンバーに告げる。
吹雪が滑り始めた時、メンバーが雪玉を転がす。
「何してんだ?」
「危ない!」
迫る雪玉を避けた
「すげぇ…あの雪玉のめちゃめちゃな動きを見切ってるぜ!」
疑問視する雷門に銀が教える。
「これはスピードに目を慣れさせるものだ。
お前らの試合を見た時に思った。奴らのスピードは確かに早い。だが、俺の目には普通に見えるが、お前らでも訓練次第で普通に見える。」
「それでなんでこの練習?」
「スノーボードで両足を固定。かつ、猛スピードで滑り、自身には雪玉が迫る。危機的状況に、自らを置く。そうすることで、普段見えないものが見えてくるのさ。」
「…なるほど、確かに利にかなっている。」

鬼道は言う。
「鬼道。お前はさらに俺との1対1も加える」
「なに？」
「先ほどの試合でも感じた。この雷門、お前が心臓だ。お前が機能しなければ終わる。ストライカーも士郎がいても、攻撃を支持するお前がダメならダメだ。だから俺と1対1をしてもらう。キープ力をつけ、味方がマークを外せるまで待つ。この力が必要だ。」
「なるほど…やろう」
「だが、まぁ、今お前らに必要なのは慣れだ、だからここで滑ってもらう。」
と銀が言う。
「まぁ、見てな…こうやるのさ」
「しかし白鷺、防具はいいのか？吹雪は、つけてるのに…」
「いらねーよ」
そして滑り出す。
銀は見切り見切り。
一度もかすりもしない。
「すげぇ…」
「これは一体…」
「相変わらずだね、銀は」
「吹雪！白鷺はどうやっているんだ？
「銀にはね、未来が見えてるのさ」
「「未来ぃ？」」
「そんな２０秒先の未来とかじゃないけどね、
銀はすごい集中してる時、相手の筋肉の動作から未来を読んだりするんだ」
「だけど、雪玉には筋肉とかの動作はないぞ？」
「うん。銀は頭がいい。普段でも動体視力は凄いものがあるんだ。それと、自らの予測能力が高いから銀は当たらないんだよ。」
「そう言うことか…」
「ふう…ざっとこんなもんか。慣れればこのくらいできるさ。」

「なぁんだ。結局遊びの延長じゃねーか。俺たち雷門イレブンの特訓は遊びとは違う。苦しい特訓を超えて強くなることに意味があるんだ！」
　そう言う染岡に銀と吹雪は言う。
「お前はダメだな。使えねぇ」
「やっぱりそう言うのは疲れるなぁ。」
「同じ力をつけるなら楽しくやりたいな」
「それには一理あるな」
「なんだよ一ノ瀬まで！」
「見ろよ、円堂はやる気だぜ？」
「俺さ！スノーボードにやったことないんだ！教えてくれ！……わ！あぁ！止めてくれ！」
　と円堂は滑り雪玉にぶつかる。

「…鬼道、財前、土門は、いけそうだな。他はてんでダメだな。」
「くっそー！絶対風になってやる！」
「キャプテン！楽しむんだよ！楽しんだら体の方が付いてくるよ！」
「……チッ。」

―――――――――――――――――――――――――――――

「いててて…風になるのって大変だな…」
「しっかりしなよ、私は慣れてきたよ」
「あぁ、財前は筋がいい。」
「問題は体のバランスの取り方だ。」
「あぁ！慣れたらいけそうだな！」
　そう言う円堂、財前、銀、鬼道、土門。
　その後ろで染岡が、風丸に聞く。
「どうだった？」
「まだまだ、体を思うように動かせない。エイリア学園が来るまでにマスターしたいよ。」
「俺腹減って死にそうっすよ」

「頑張れ！壁山！晩飯はもうすぐだ！」
ガラガラ！
「「いらっしゃぁーい！」」
「お！飯の匂いだ！…えぇ！これだけぇ…」
とごねる壁山と円堂。
監督の指示でスピードを上げるためと言われるが、納得できない壁山。
結局円堂の説得で諦めたようだ…
「…俺はいらない。失礼する。」
「え!?白鷺、お前いらないのか？」
「あぁ、俺はそんな暇も惜しいんだ。」
円堂はそんな白鷺を心配しつつ、食べ始める。

―――――――――――――――――――――

イナズマキャラバンの上にて。
「今日は助かったよ。」
「え？」
「吹雪達と染岡がぶつかった時、お前は吹雪達に合わせてくれるって言ってくれたからさ」
「あぁ。」
「他人に変わるように求めるなら自分たちも変わらないとな。」
「そうだな。」
「あいつらはすごいな。俺たちも変わっていこうぜ！あいつらに負けてなんていられない。」
「あいつらを生かすにしても誰かがボールを取らなきゃな。それが勝利の鍵になる。」
「あぁ！風になればできるさ！」
「……なれなかったら？」
「そんなこと言うなよ！」
「力が欲しいんだ。エイリア学園を倒すためなら、神のアクアを使うのも、許されるんじゃないのか？」

「神のアクアをなんて必要ない！それじゃあの影山と同じになっちまう！
　俺たちは正々堂々と戦って絶対に勝たなきゃいけないんだ！」
「悪かった。何焦っているのかな俺。忘れてくれ」
「特訓特訓！なろうぜ風に」
――――――――――――――――――――
　その頃銀は…
「俺が現状奴らに勝てる可能性は１００％だが、奴らに勝つことがゴールじゃない。極地至ることが全てだ。…今日はトレーニング倍にしとくか…」
　そう言い銀は1人森を歩く。
　結局その日の夜銀は戻らなかった。

５話：試合開始！

ーーーーーーーーーーーーー

次の日円堂と風丸が朝イチに行くと、
染岡がスノボーで練習していた。
そしてその練習にて、円堂と染岡と、風丸がコツをつかんだ。
朝飯と、昼飯だけたくさん食べれて夜はお代わりなしという事もあった。

その後の練習にて、
雷門はスノボーで雪玉を避けるのが上手くなった。
「すごいすごい！みんな避けるのが上手くなってきましたね！」
「それだけスピードに慣れてきた。早いスピードの中で周りが見えてきたってことだわ。」
「すごいすごい！みんな早くなってきたね！、もっともっと早くなれるよ！」
次の日も次の日もそれをこなす。

ーーーーーーーーーーーーー

その頃銀は…
「まだだ、まだ足りない…」
１人苦悶していた…

ーーーーーーーーーーーーー

瞳子サイド
「みんな特訓の成果が出てます。吹雪くん達の加入がみんなに良い影響を与えているようです、で、エイリア学園の動きに何か情報は…」
「今は何もない。
いつ、奴らが現れるかわからない。常にコンディションを維持するようにしてくれ」
「わかりました。」

ーーーーーーーーーーーーー

その日もスノボーの練習をしていた。

そして吹雪がマネージャー達に近づいた
「みんな避けるのが様になったと思わない??」
「うん!想像以上だよ!」
「私も彼らを率いて短いけど、彼らは打てば響く選手よ。それもこっちの想像をはるかに超える勢いでね」
そう話していた。そこに…
「そうだな…それに関しては同意する。」
森の奥からボロボロの銀が出てきた。
「白鷺さん!?今まで何してたんですか!?」
「そんな叫ばなくて良い。練習してただけだ。」
「そうかもしれないですけど、ずっと何も食べてないんですか!?」
「別に2日3日抜いた程度じゃ死にゃしない。」
「白鷺さん…」

音無はとても心配している。
そこに、染岡が滑ってくる。
「吹雪!俺と勝負しようぜ!」
「勝負?」
「あぁ、俺の特訓の成果をお前で試そうと思ってな!」
「つまり、どっちが雷門のエースストライカーか決めるってことかな?」
「そう思ってもらって構わないぜ」
そう火花を散らす2人。
それを見て銀は離れようとするが。
瞳子が銀に
「白鷺くん。今から食事を取ってもらいます。確かに特訓することは構わないけど、それで体調を崩される方が迷惑よ」
「……チッ…わかりましたよ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

練習後…
「ルールは簡単だ、センターから2人でボールを蹴りあって先に決め

た方が勝ちだ！
　　　　よーい！はじめ！」
円堂の開始の合図で始まる。
先にボールを奪ったのは吹雪。
しかし染岡も食らいつく。
そして染岡が吹雪からボールを取る。
しかし吹雪はまたも、性格が変わる。
２人は激しくぶつかり合う。
けられたボールはポストにあたり跳ね返る。それを蹴ろうとした
吹雪は、リスがいるのを見つける。
それで躊躇ったことにより。ボールを取られる。
そしてそのまま決められる
「染岡！いま、足にすごいパワーが集まってたぞ！特訓の成果だな！」
「あぁ！手応えあったぜ！これで豪炎寺の代わりにやれる！」

そう盛り上がる雷門。
銀は吹雪に近寄る。
「…よかったのか？本当のことを言わなくて」
「良いんだよ」
「そうか…」
――――――――――――――――――――――

瞳子は、理事長に電話する。
「理事長、吹雪くんがＦＷ．ＤＦになる時性格が変わるのは何かあるんですか？」
「あぁそれは……―――――――――――
――――――――――――――――――――――

次の日
白恋中の上空が黒くなる。
「何…？？」

荒谷は不安がる。
「円堂！」
「とうとうきたな！待ってたぜ！エイリア学園！勝負だ！これ以上サッカーを破壊の道具にさせない！」

吹雪と銀は雷門のユニホーム、２８と９を着る。
「私たちの学校壊されちゃうの…」
「大丈夫だよ、白恋中は僕らが守る」
「あぁ、任せときな」
「吹雪！白鷲！頑張ろうぜ！」
「エターナルブリザードと、ゴッドブラスターで奴らをバシバシ吹っ飛ばして欲しいでやんす！」
「うん、宇宙人なんかに負けないよ！」
「…ふん。」
「吹雪くんあなたはＣＢ、白鷲君はＤＭＦに入ってもらうわ、２人ともシュート技を使うことは禁止よ。守備に徹してもらうわ」
「え!?吹雪と白鷲のスピードは、奴らを攻めるのに必要です！なぜです!?」
「意見は聞いてないわ」
吹雪と銀に得点を期待してたが瞳子は、２人を守備に専念させる。
それで瞳子に不満があつまるが、円堂の一声でなんとかそれもなくなり、夏美と鬼道の結論で完全にそれはなくなる。
「そうさ！あとは俺たちが結果を出すだけだ！」
「へっ、俺のシュートで勝利を決めてやる！」
「僕たちも白恋中とみんなを守るために全力で戦うよ！ね、銀」
「あぁ」
「よぉーし！絶対に奴らに勝って半田達に勝利の報告を届けるんだ！」
「「「はい（おう！）（あぁ！）！」」」
「やるぞ！今度こそエイリア学園の侵略を終わらせるんだ！」
雷門はこの布陣で攻める

染岡

風丸　鬼道　財前　一ノ瀬
土門　壁山　吹雪　栗松
白鷲
円堂

雷門を見てレーゼは言う。
「本気で我々に勝てると思っているなら愚かとしか言いようがない。」
「なんだと!?」
「言わせておけ　俺たちのサッカーで黙らせれば良い。」
「こんな雑魚恐るるに足らん。俺がいれば点は入らない。俺らは負けない。なぜなら俺がいるからだ、だからそんな戯言言わせておけ」
憤る染岡に鬼道と銀は言う
「頑張れ！吹雪くん！白鷲くん！」
「おいら達の学校をまもってよー！」
「頼むぞー！」
「宇宙人をぶっとばせー！」
白恋中の人達が応援する。
「さぁ！風なろう！」
「うん！みんな！ファイトだ！」
ついに試合が始まった。
（絶対は僕だ。この試合全てを得て極地へと至る！）
「行くぞ！」
「さて、少しは楽しませてくれるのかな」
「見せてやるで、俺たちのパワーアップしたところを!!」
「…ふん。この程度か」
染岡に対し二人掛かりでとる。
そしてレーゼに渡る。
ディアムが加速していく。
しかし、みんな特訓で見えている。
次々にパスをカットしていく。
「風になれたね…」

「宇宙人と互角に戦えてます！」
「すごい！」
その後ディアムが持ったボールを塔子がとる
そしてボールは風丸へ
「疾風ダッシュ！…いけ！染岡！」
風丸は染岡にパスをだす。
「くらえぇ！ドラゴンクラッシュ!!」
「ふん…　ブラックホール！」
染岡のシュートは止められた。
「惜しいぞ！その調子でどんどん行け！」
「いや…もっとスピードがないとダメだ」
レーゼが上がる。
「士郎！右だ！」
「うん！アイスグランド!!」
レーゼからボールを奪う。
「吹雪さんのスピードと白鷺さんの未来視がなかったら止められなかったっす！」

壁山は気づく。
しかし。レーゼはいう
「我々のスピードと同等。そして、先が読めるのか。一応の学習能力があるようだな。だが、これで遊びは終わりだ」と
レーゼが、パスを出す。
雷門は見たことないパターンのため止められない。
そしてレーゼがボールを持ち。放つ
「アストロォォブレイク!!」
それに対し塔子は、ザ・タワーを、壁山はザ・ウォールを発動させる。
しかし、全く持たず崩れる。
そこに銀が走る。
「言っただろう。俺がいれば点は決めさせないと！

デス・サイズ！」
「すげぇ！なんて威力の必殺技だ！」
「この程度か。宇宙人。やはり貴様らは雑魚だな。話にならん。」
そう言って銀はボールを外に蹴り出す。
そして…
ピッピッーー!!
ここで前半終了
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ハーフタイム中。
瞳子から、
「吹雪くん。白鷺くん。あなた達の攻撃は解禁よ、点を取りに行くわ」
と言われる。
「でも、ＤＦは、どうするでやんすか？」
「心配するな。みんな奴らの動きに対応できている。」
「監督おれはもう大丈夫です！」
「わかったようね」
「えぇ」
「どういうこと？お兄ちゃん」
「俺たちは、スピードに対抗する練習をしたが、あいつらのスピードに慣れるには時間がかかる。」
「なるほど、失点のリスクを減らして」
「奴らのスピードを把握するためか！」
「吹雪くんと白鷺くんにＤＦに専念させたのは」
「中盤を突破されたら、あのスピードと未来視がなかったら防げなかったわけでやんすね！」
雷門は瞳子の考えに気づいたようだ。
「なら、初めからそう言ってくれればよかったのに…」
「でも自分たちで答えを出す方が何倍も力になるわ」
「秋の言う通りだ！答えを知りたければ汗をかけばいいんだ！吹雪！白鷺！どんどんゴールを狙っていけ！」

「うん!やってみるよ!」
「…」
「白鷺?大丈夫か?」
「銀はこうなったら聞いてないよ、でも、自分がやるべきことは完璧に、それ以外もこなすから安心して」
「…ふん。」
黙り集中する銀をフォローする吹雪を染岡は睨む。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「レーゼ様…やつら我々の動きに適応し始めています。油断はできません。それにレーゼ様のシュートを止めたやつも気になります。」
「人間め…我々に抵抗しても無意味だと教えてやる。」
後半雷門はフォーメーションを変えた。

染岡
風丸　白鷺　一ノ瀬
鬼道　財前
土門　壁山　吹雪　栗松
円堂

(…まだだ。俺はまだ機能していない。
考えろ。頭を回せ。全てを見ろ。俺ならできる!)
ピッー!!!!
運命の後半戦が始まった

6話：後半開始ー決着！

後半戦が始まる。
レーゼは、ボールを受け取り…1人加速する。
「ここからは全力でいかせてもらう！」
その前に銀が立つ。
「…この程度か。やはり貴様は弱い。」
そう言ってレーゼに超スピードで近づき、ボールを奪う。
「なんだと!?…くそ！ボールをよこせ！」
レーゼはボールを奪いにかかる。
しかし…
「…今から貴様らには、地に這いつくばってもらう。」
そう言い、レーゼに向け超速のボールを放つ。
「な、なんだと!?…ぐわぁっ！」
レーゼは吹っ飛ぶ。
「し、白鷲…？どうしたんだ？」
前半とは違いあまりに豹変した銀。
それに対し、鬼道は心配するが。
「どうもしてない。これから戦闘を開始する。」
「なっ…！おい！白鷲！」
銀はそういい加速する。
「くそ…なんなんだあの人間は！お前達！そいつは全力で潰せ！」
「アツヤ！来い！こいつらをここで潰す！」
「……へっ!!やっぱり銀はわかってるな！」
銀と士郎は、2人で加速する
そこに、
「フォットンフラッシュ！」
「グラビティション！」
技を食らう。
しかし、白鷲がとられたら吹雪が、吹雪がとられたら白鷲が取るなどをしてゴールへ迫る。

「白鷺、吹雪！無理するな！ボールを回せ！」
「点が欲しいんだろ!!ほらよ！銀！お前が決めな！」

「…あぁ。ここで消えてもらう。」
ボールを銀が打ち上げ、そして、叫ぶ。
「くらえぇ！デス！スピアァァァ!!!!」
ぎゅいいいいいん！
凄まじいまでの破壊力。スピードを持ち迫る。。
それに対し
「ひ、ひぃい、ぶ、ブラックホール！」
「…そんなチンケな技で止められると思ってるのか。潰れな」

シュートはキーパーごとゴールに突き刺さった。
「…ここに貴様らの敗北が決定した。俺たちを地球人と舐めた結果がこれだ。これから点差が開くことはあっても、縮まることはない。…まぁ、精々頑張るんだな…」

そういい振り向き歩き出す。

「おい！白鷺！」
「？どうかしたか？」
銀は凶暴的な雰囲気は消え、前のような雰囲気になっていた。
「い、いや…先ほどのプレーはやめろ。あれではエイリア学園と同じだ。」
「なんだと？俺は奴らに対抗するためには徹底的に使うつもりだ。
あいつらは今までこの手を使ってきた。
ならやられても仕方なくないか？」
「なんだと…!!」
そう、風丸と鬼道に言い返す。
しかし…
ピピッ!!

「選手交代よ!白鷺くん!」
「…チッ…」
「あとで話があります。だけど、今は体を休めて。栄養失調で、今も倒れそうなのを耐えているのはわかっています。」
「…わかりました。失礼します。」
「白鷺さん。」
「音無か…」
「こっちに来てください。今はおにぎりしかないですが、なにかを入れるだけでも変わります。食べてください。」
「いや、いら「食べてください!……
わかった…わかったから離れろ。」
そして銀は音無からおにぎりをもらい、ベンチに座る。
そこに夏美と木野は、銀に聞く。
「白鷺くんはなんでさっきのようなプレーを?」
「士郎は俺がいない状態で試合をしたことがない。小さい時から俺が指示し、吹雪が守り、2人で決めてきた。しかし。今士郎に必要なのは俺に頼ることじゃなくて、一人で決める力だ。だから、あの手を使えば監督は変えてくれると踏んだ。…まぁ、だが、先ほど風丸と、鬼道に言ったことは本心だがな…」
気持ちが高まった銀の瞳は紅くなっていた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
吹っ飛ばされ、点を決めたレーゼは動揺していた。
(な、なんなんだあいつは…あのスピード、パワー、判断技術、精度、全てを見ても…エイリア石を使わずに強くなった、マスターランクチームの奴らと同じ…
認めない!…だが、なぜか奴は下がった。
今がチャンスと見るか…)
雷門は銀の交代の後フォーメーションを変えた。
「さっきの白鷺の得点は偶然と見るべきだ。」
「あぁ、ここは吹雪で攻めていこう。頼むぞ吹雪」

「うん、銀がいなくても僕は完璧になってみせるよ」
エイリア学園ボールで試合が再開する。
ジェミニストームが攻めてきたところで塔子が技を発動。
「ザ・タワー!!」
「こっちだ!」
染岡がボールを要求するがそれを吹雪がカットそして。
「吹雪!」
「へっ、ゴールを奪うんだろ?銀がいない今俺に任せとけばいいんだよ!」
そう言って一人上がっていく。しかし…
「フォトンフラッシュ!」
吹雪は技を食らってとられる。
「決められなかったじゃないかよ!なに考えてんだ!」
「いいから見てろ!本番はこれからだ!」
ジェミニストームはボールを回す。
それに対し鬼道は考える。
「(どうやって連携している。)」
ペロッ…と相手が舌なめずりする。
それを見て一ノ瀬が気づく。
「そうか!…フレイムダンス!!」
「まただと!どうなっている!邪魔者はもういないはずなのに!」
「やったな!、すごい技じゃないか!」
「どうやって気づいたんだ?」
「奴らにも癖があるんだ、それでパスを出す方向がわかるんだ!」
「宇宙人にも癖があるんだ」
その後ジェミニストームボールとなるが、
また一ノ瀬が癖を見抜きパスをカットする。
そしてそのまま一ノ瀬が上がっていき。
吹雪に渡す。
「やつを止めろ!」
レーゼは吹雪を止めるように指示を出す。

「きたな…染岡ぁ！」
まさかの染岡にパスを出す。
染岡はそれに驚きつつシュート体制に入る
蒼い龍が空を飛び染岡のシュートに合わせ飛んでいく。
「な、なぁに!?」
そのまま決まった。
「くぅぅぅ―!!
!!よっっしゃぁぁ！」
「やったぁ!!」
「追加点だ!!」
これで雷門は2―0と突き放す
「よぉぉし!!やったぞ染岡！」
「どうだ!!決めてやったぜ！」
「あの技はドラゴンクラッシュの進化版…ワイバーンクラッシュと呼ぶべきでしょう。」
と盛り上がる。
そこに、吹雪がいう。
「へっ、まだ買ったわけじゃねーだろ。もう一点俺が決めてやる」
そういう吹雪を染岡が見るが、最初ほど悪感情はない。
ついに試合はロスタイムに突入する。
「我々が離された。こんなことが…
我々エイリア学園はただの人間に負けるなどあり得ない。あってはならないのだ！」
そういい、レーゼは超加速で攻め上がり
ディアムと技を発動させる。
「ディフォンス！くるぞ！」
「「おう!!」」
「ユニバース!!ブラストォ!!」
財前と壁山の技を秒で破壊。
そのままの勢いで円堂に迫る。
「マジン・ザ・ハンド!!」
しっかりと発動できた。そして…

止めた。
「いくぞ!!反撃だ!」
円堂は染岡に渡す。
(この試合絶対に勝つには…)
そう考えながら、吹雪を見る。
「止めろ!絶対にシュートは打たせるな!」
レーゼは染岡を止めようとするが…
「いけ!吹雪!」
なんと染岡が吹雪にパスを出した。
「染岡!?あぁ!!

吹き荒れろ!!!
エターナル!ブリザァァード!!!」
吹雪のシュートは、キーパーを吹き飛ばし、ゴールを決めそのまま凍りつかせてしまった。
「ナイスアシスト」
吹雪は染岡にそう言った。

そして…
ピッピッピッー!!

「終わった…?はは!勝った!やったぞー!!」と盛り上がる雷門。
日本全体が喜んでいる。
ジェミニストームは呆然としている…
「バカな…我々が負けただと…?」
「地球にはこんな言葉があるのよ。三度目の正直という言葉がね。
「その通りだ。宇宙人だなんだと言っても所詮は雑魚、俺の敵ではなかったな。」
そういう夏美と銀をレーゼは睨み殺さんばかりである。
白恋中のメンバーも喜ぶ

「学校を守ってくれたね！」
「みんなとの約束だからね」
「俺がいれば負けることはないの知ってただろう？」
「ありがとう！吹雪くん！白鷲くん！」
そう言われる二人を見て染岡は笑う。
「パパ！やったよ！宇宙人を倒したよ！」
「半田、マックス、みんな！俺たち勝ったぜ！」
「監督ありがとうございました！」
「おめでとう。」
そういう雷門に、レーゼは言う。
「貴様らは知らないのだ。イプシロンに比べれば我々など…」

情けないぞレーゼ
「で、デザーム様！」

「試合で負けた貴様らを追放する。」
そうデザームと言われた男が蹴ったボールによってジェミニストームが消える。
そして暗い雲に消えながらいう。
「我々はファーストランクチーム、イプシロン。ジェミニストームを倒した貴様らを倒すものだ、覚えておけ」
そして完全に消えた…

そして円堂はみんなが思っていることを代弁する。
「エイリア学園との試合はまだ終わってない…！」
（この試合も未だ達しなかった。俺には何が足りない！何がいる！）
そう、銀は消えるデザームを見ながら考えていた